

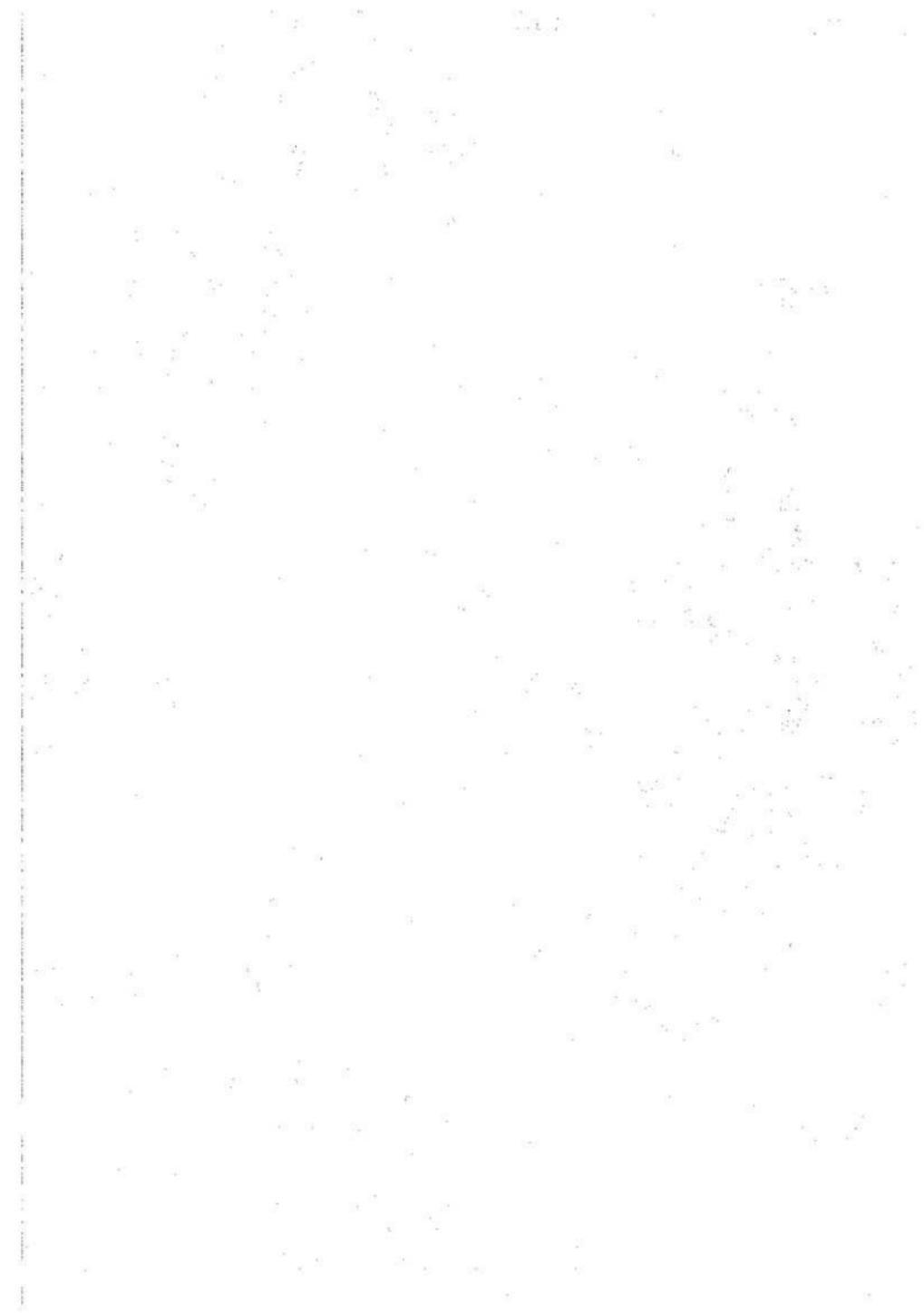
上野原市埋蔵文化財調査報告書 第8集

狐原 I 遺跡

診療所新築造成工事に伴う狐原 I 遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

上野原市教育委員会



序

本書は、平成 28 年、診療所新築造成工事に伴って実施した狐原 I 遺跡の発掘調査報告書です。

狐原 I 遺跡は、隣接する狐原 II 遺跡と共に桂川を望む河岸段丘にあり、平成 6 年から平成 9 年までの発掘調査によって、縄文時代から平安時代の遺跡が良好な状態で保存されていることが分かっています。とくに、古墳時代から平安時代の集落跡は規模が大きく、鉄製の焼印や銅製の飾り金具など特殊な遺物も出土しています。

このたびの発掘調査でも、発掘面積は小規模ながら、住居跡と考えられる遺構や土器などの遺物が多数見つかりました。

本書が歴史の証として多くの方々に活用され、埋蔵文化財や郷土史への理解が深まるることを願ってやみません。

結びに、調査にあたって終始ご協力いただいた工事主の上條武雄氏や設計者の㈲山下調査測量、並びに関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成 28 年 12 月

上野原市教育委員会

教育長 和田正樹

例　　言

1. 遺跡名は狐原I遺跡である。
2. 遺跡の所在地は山梨県上野原市新田字狐原である。
3. 調査原因は（仮称）上條診療所新築造成工事で、経費負担者は事業主の上條武雄氏である。
4. 調査主体は上野原市教育委員会で、体制は次のとおり。
和田正樹（教育長）、尾形　篤（社会教育課長）、
倣田清美（社会教育担当リーダー）、小西直樹（社会教育担当）
5. 発掘・整理担当、報告書の編集・執筆・写真撮影者
小西直樹
6. 調査期間
発掘 平成28年7月19日から平成28年8月5日
整理事業 平成28年8月19日から平成29年2月28日
7. 整理作業は旧平和中学校で行った。
8. 記録類や出土品は上野原市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係り山梨県教育委員会学術文化財課より指導・助言をいただいた。
10. 発掘調査参加者
古根村典子、富岡ます美、曾根富士雄、石井正吉、大神田重治、丸山道彦、河内勝代

凡　　例

1. 遺構・遺物の実測図縮尺は図版スケールに明記した。
2. 土器の実測図は四分割方を用い、左半面に外面、右半面に内面及び土器の断面形を表した。中軸線が一点鎖線の場合は180°回転させ復元実測したことを示す。
3. 記号や表示パターン
 - (1) 土師器実測図の矢印は器面の砂粒の移動方向を示し、整形工具の使用方向を推定した。
 - (2) 土師器実測図の網掛け部は赤彩を示す。
 - (3) 須恵器実測図の断面は黒色に塗りつぶした。
4. 遺物観察表の法量（ ）は推定値である。
5. 遺物注記の略号はつぎのとおり。遺跡名 キハ9

遺構・発掘区	注　記
1号堅穴	1住1~8
2号堅穴	2住1~3
1号ビット	1号ビット
1号土坑	1号土坑
1号集石	集石
A~Eトレンチ	A~Eトレンチ
西境発掘区、西トレンチ	P1~2
中トレンチ	G1~2
東トレンチ	H1~6
東境発掘区、東境トレンチ	I1~4

目　　次

序　例言　凡例

第Ⅰ章　遺跡の位置と調査の経過	1
第1節　遺跡の位置と概要	1
第2節　調査に至る経緯と経過	1
第3節　調査の方法	1
第4節　遺跡の層序	1
第Ⅱ章　調査の成果	3
第1節　縄文時代	3
第2節　古墳時代後期から奈良・平安時代	3
第Ⅲ章　まとめ	5
写真図版	
報告書抄録	

第Ⅰ章 遺跡の位置と調査の経過

第1節 遺跡の位置と概要

狐原Ⅰ遺跡は山梨県上野原市新山に所在する。柱川（柏模川）北岸に張り出した河岸段丘に位置し、東対岸は神奈川県相模原市である。現地は南面傾斜の広い耕地（約5ヘクタール）が2段に連なる地形で、昭和47年の遺跡分布調査で下段を狐原Ⅰ遺跡、上段を狐原Ⅱ遺跡とした。平成6年度から4ヵ年の発掘調査では、両遺跡で縄文時代から平安時代の集落跡や多数の遺物が出土した⁽¹⁾。とくに銅製飾り金具や鉄製焼印など特異な遺物も出土し、両遺跡が柏模川上流域の拠点的な集落であったものと考えられている。

註1 2015『狐原Ⅱ遺跡』上野原市埋蔵文化財調査報告書第7集 上野原市教育委員会

第2節 調査に至る経緯と経過

平成28年2月、診療所新築造成工事の事業者側より埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。工事予定地は上野原市新田26-4, 47, 48番地で、計画では市道沿いの平垣地と一段下がった広い緩斜面地を造成して診療所2棟を建設するものであった。予定地が狐原Ⅰ遺跡及びⅡ遺跡に該当したため、事業者側に文化財保護法第93条の届出を求め、平成28年3月24日～28日に試掘調査を実施した。試掘坑は幅2m・長さ4mを基本とし、5ヶ所をバックホーで掘り下げた。試掘总面积は34m²で、調査対象面積1,300m²の約3%であった。調査の結果、上段（狐原Ⅱ遺跡）で遺構や遺物は無かったが、下段（狐原Ⅰ遺跡）では全ての試掘坑で古墳時代後期から奈良・平安時代の遺構や遺物が見つかった。このため、山梨県教育委員会・学術文化財課や事業者側と協議し、上段を慎重工事、下段を盛土保存とし、掘削が地下遺構に達する部分を記録保存することになった。

発掘調査は平成28年7月19日から同年8月5日まで実施した。発掘面積は232m²である。出土品等の整理作業は発掘終了後から開始し、平成28年12月までに報告書の編集作業を終了した。

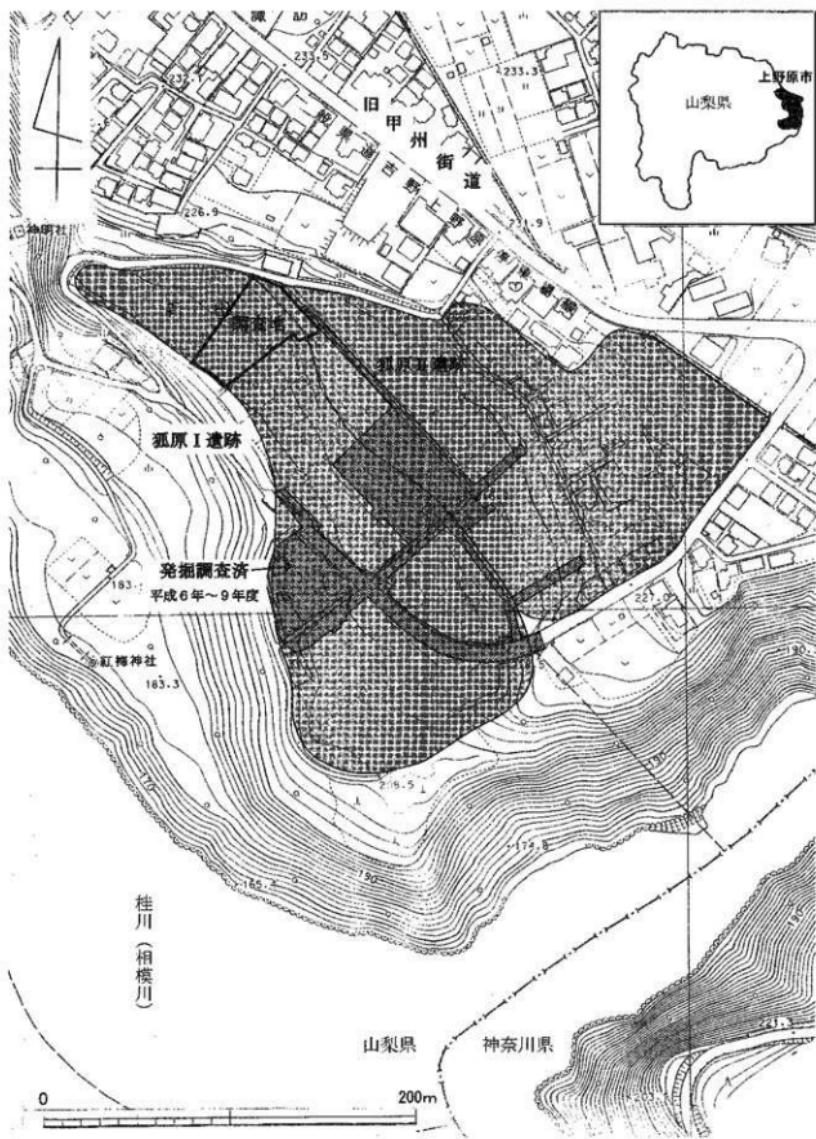
第3節 調査の方法

発掘調査の対象区域は、診療所の建物と盛土擁壁の基礎部分に限定した。建物予定部には試掘溝（幅2m・長さ15m）を入れ、遺構が見つかった範囲を拡張して調査した。工事区域の外周と中央の擁壁部は、幅1.4m～2mを発掘した。調査は、バックホーを使って遺構確認面まで段階的に掘削した後、人力で遺構・遺物を検出した。最終的な発掘調査の総面積は232m²である。

第4節 遺跡の層序

調査地は河岸段丘の緩斜地で、一面が草に覆われていた。土層は厚く、層序は比較的安定しているが、段丘縁辺で層厚が急に薄くなり、表土直下でハードローム層となる。基本層序はつぎのとおり。

第Ⅰ層（表土）はⅠ耕作土。第Ⅱ層から第Ⅲ層は黒色スコリア（5mm以下）を多く含む暗褐色土で、第Ⅳ層は黒色朱が強い。第Ⅴ層は黒色・橙色スコリア（5mm以下）を多く含む黒褐色土である。第Ⅵ層は粘性と縮まりがやや強い暗褐色土で、橙色スコリア（3mm以下）を多く含む。第Ⅶ層は暗褐色土で、褐色土を斑に含む。第Ⅷ層はソフトローム層で、第Ⅸ層がハードローム層である。



第1図 遺跡範囲と調査区の位置

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 繩文時代

保存のため古代遺構面の発掘は行わなかったが、表土が薄い段丘縁辺で集石1基を検出した。遺物は土器の細片が遺構外でわずかに出土した。

(1) 集石

1号集石(第3図、図版1)

緩斜面地に位置し、西側が未調査区にかかる。確認面はローム層(第VII層)上面である。平面不整円形の掘り込みを作り、掘り込みは長軸115cm、深さ24cmで、横面の立ち上がりは東壁を除いて緩やかである。壁面に被熱痕は無かった。礫は掘り込み内に集積し、細片が周囲に拡散する。礫の集積方法は、底面に平たい凹石1個を据え、直上に比較的大きな礫7個を花弁状に重ねる。このうち西端の礫は垂直に立て、東端の礫は壁面沿いに据えている。覆土は暗褐色の単層で、焼土や焼化物は含まない。

出土した礫は総数28個で、総重量52.6kgであった。大半の礫は破損するが、接合関係はない。完形礫は5個(23.9kg)で、このうち下部集積に用いられたものが3個であった。大半の礫は被熱による赤化が認められ、下部に用いられた花崗岩はボロボロに崩れる状態であった。石材は砂岩、礫岩、石英閃綠岩、花崗岩、玄武岩である。

出土する器ではなく、凹石(1)が集石最下部に転用されていた。凹石は完形で、長さ30.8cm、幅26.3cm、厚さ8.7cm、重さ9.04gである。片面に、すり鉢状や点状の凹みが複数認められる。石材は玄武岩質で、全体に被熱のため赤化している。

遺構の時期は不明確だが、同様の遺構が隣接地域の発掘調査で多数見つかっており、いずれも繩文時代早期から中期で捉えられているため、本遺構もこの時期のものと思われる。

(2) 遺構外出土遺物(第4図)

1は、条線地に波状貼付文を持つ深鉢で、繩文時代中期後葉の前利式に当たる。2は、弧状の沈線文を配した球胸の深鉢で、繩文時代後期前葉の堀之内式に当たる。

第2節 古墳時代後期から奈良・平安時代

堅穴状遺構2軒、ピット2基、土坑1基を検出した。この他に、堅穴と思われる方形黒色プラン1軒、黒色円形プラン(ピット2基、土坑1基)を試掘調査で確認したが、盛土保存のため発掘は行わなかった。遺物は土師器が大半を占め、次いで須恵器が多い。わずかに灰釉陶器、編物石、鐵鐵が出土した。

(1) 堅穴状遺構

堅穴住居の可能性はあるが、発掘範囲が限られていることから、本書では堅穴状遺構とした。

1号堅穴状遺構(第5~7図、図版2)

試掘調査時に確認した。遺構の大半が未調査区にかかり、北東側の試掘溝にかかる部分は遺構確認面の検出に止めた。確認面は第III層で、第IV層を掘り込む。南西壁を除いて壁が失われ、遺存状況は悪い。

平面は方形と推定され、南西壁は残存長400cm、高さ38cmを測る。床面の硬化はなく、貼り床は未確認である。覆土は暗褐色土を主とし、焼土や白色粘土を多く含む。土柱穴や周溝は未確認である。

南西壁の直下に掘り込みを伴う焼土址があり、カマド火床の可能性がある。周辺にカマド構築材と思われる被熱した石や白色粘土が散乱していた。掘り込みは平而横円形で、長軸 58 cm・短軸 46 cm・深さ 15 cm を測る。覆土上層に硬質の焼土が堆積する。

遺物は覆土中から多量に出上した。上器が主体を占め、比較的大きな破片も目立つ。土師器は半球形の壺（1～5）や長脛・胴張・球腹壺（7～14）、瓶（15）があり、すべて外面ヘラ削り調整である。須恵器は湖西窯産と思われる壺（6）、甕（16）がある。以上の土器は古墳時代後期と推定される。一方、底部回転糸切りの須恵器壺（18）、甲斐型壺・甕（17・19・20）は平安時代の混入遺物と見られる。このうち 19 は巻書土器だが、字形は不明である。他に織物石と思われる棒状の自然石 1 点が出土した。

時期は、遺物から古墳時代後期と考えられる。

2号竪穴状遺構(第8図、図版2)

1 号竪穴状遺構から南西 13m に位置する。確認面は第V層で、ローム層（第VI層）を掘り込む。大半が未調査区にかかる。平面は方形と推定され、西壁は確認長 330 cm、高さ 40 cm を測る。遺存状況は良い。床面は固く、貼り床が一部に施される。覆土は黒色スコリアを多く含む暗褐色土を主とし、床面に焼土や白色粘土が散在していた。周溝状の掘り込みを北壁沿いに検出した。主住穴やカマドは未確認である。

出土遺物は覆土中に分布し、すべて上部器である。体部が丸い壺（1）、胴張甕（2）は外面ヘラ削り調整である。他に、比較的硬質・薄手で、外面ヘラ削り調整の甕が若干数見られる。

時期は、遺物から古墳時代後期から奈良時代に位置付けられる。

(2) ピット

1号ピット(第9図)

1 号竪穴状遺構から南西 6 m に位置し、1 号土坑に近接する。確認面は第V層である。平面は長方形を基調とし、長軸 70 cm、短軸 46 cm を測る。確認面からの深さは最深 31 cm である。覆土は第IV層山來の黒褐色土を主体とする。柱痕は確認されなかった。覆土から上部器の細片がわずかに出土した。時期は不明である。

2号ピット(第9図)

1 号竪穴状遺構から東 6 m に位置する。確認面は第V層である。平面は円形を基調とし、直径 50 cm を測る。東端が一段深く掘り込まれ、深さ 23 cm に達する。形は柱痕状を呈するが、底面に柱の当たりは無かった。覆土は第IV層山來の黒褐色土を主体とする。出土遺物は無かった。時期は不明である。

(3) 土坑

1号土坑(第9図)

1 号竪穴状遺構から南西 4 m に位置する。確認面は第V層である。平面は円形で、直径 110 cm を測る。確認面からの深さは最深 60 cm である。壁面はオーバーハングし、底面は平坦である。覆土は第IV層山來の黒褐色土を主体とする。覆土から上部器の細片がわずかに出土した。時期は不明である。

(4) 遺構外出土遺物(第10図、図版2)

壺類は、上部器に奈良時代前半の暗文壺（1）、赤彩盤状壺（2）、平安時代の甲斐型壺（3）がある。須恵器では古墳時代後期の壺蓋（4）、平安時代の壺（5）がある。甕類は、土師器に古墳時代後期の甕（6）、甕（9）、奈良時代以降の相模窯甕（7・8）、鉢（10）、瓶（11）がある。須恵器では瓶（12・13）、甕（14）がある。鉄製品では、鑿削式の鐵鎌（15・16）が 1 号ピット近隣で出土した。

第III章 まとめ

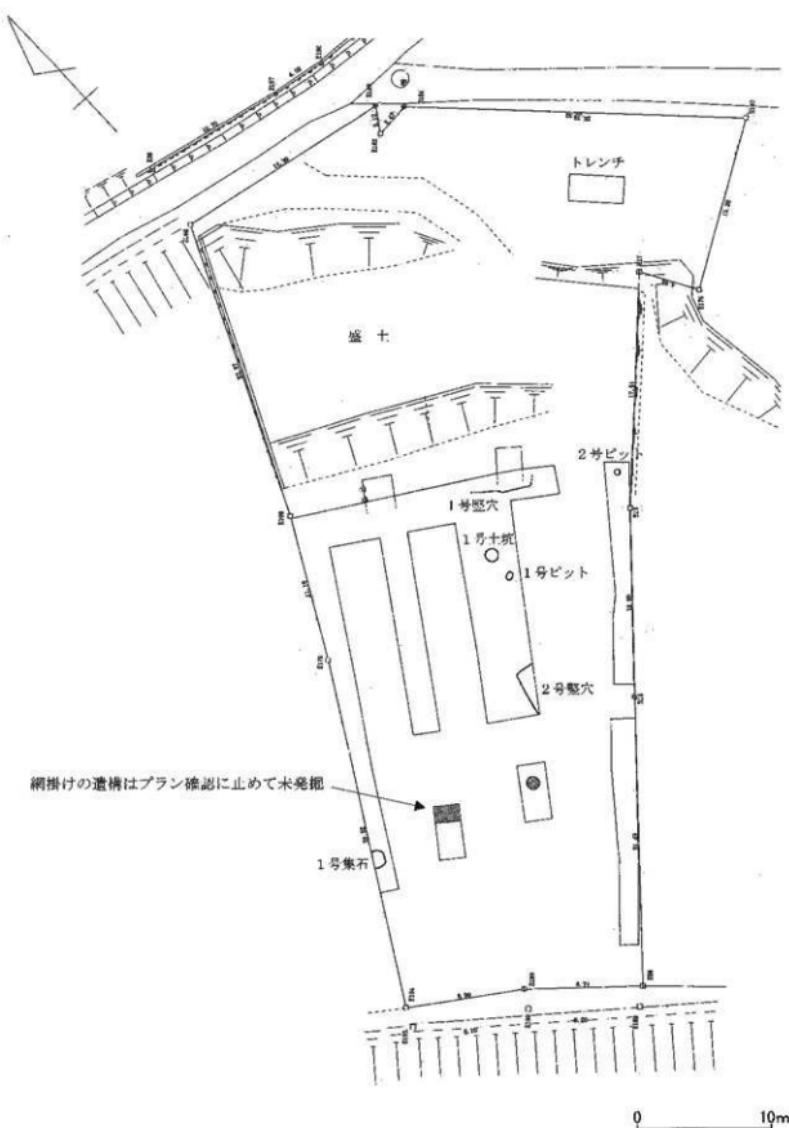
狐原遺跡は複数の河岸段丘面に立地するため、下段を狐原Ⅰ遺跡、上段を狐原Ⅱ遺跡に分けている⁽¹⁾。これまでの発掘調査では、狐原Ⅰ遺跡で縄文時代早期から中期に想定される屋外集石群、狐原Ⅱ遺跡で縄文中期後葉の竪穴住居群を検出したが、古墳時代以降の集落は両遺跡にまたがっている。集落は、古墳時代前期に出現し、古墳時代後期に拡大して奈良・平安時代までほぼ継続して営まれており、市内最大規模の拠点的集落と呼べる。

今回の調査は狐原Ⅰ遺跡の西側で実施した。古墳時代後期以降の遺構・遺物は主要な成果であり、竪穴や円形土坑、ピットが散在する状況を確認した。竪穴2軒は、出土土器から古墳時代後期から奈良時代（狐原遺跡上器編Ⅰ期・Ⅱ期⁽²⁾）に相当し、遺跡内で遺構数が急増する時期にあたる。竪穴は、これまで遺跡内で検出した竪穴住居と同じく北東方向を向いており、形状等からカマドを持つ住居と思われる。ただし、1号竪穴の焼土址をカマド火床に捉えると南カマドとなり、本遺跡で一般的な北カマドの住居とは異なる。今回の調査では、古墳時代後期以降に、竪穴住居等の遺構群が少なくとも東西約200mに渡って展開し、集落が段丘全面に拡大した様相を確認できた。こうした遺構数の増加と集落の拡大は、古代都留郡の成立と連動した変化と見ることができる。

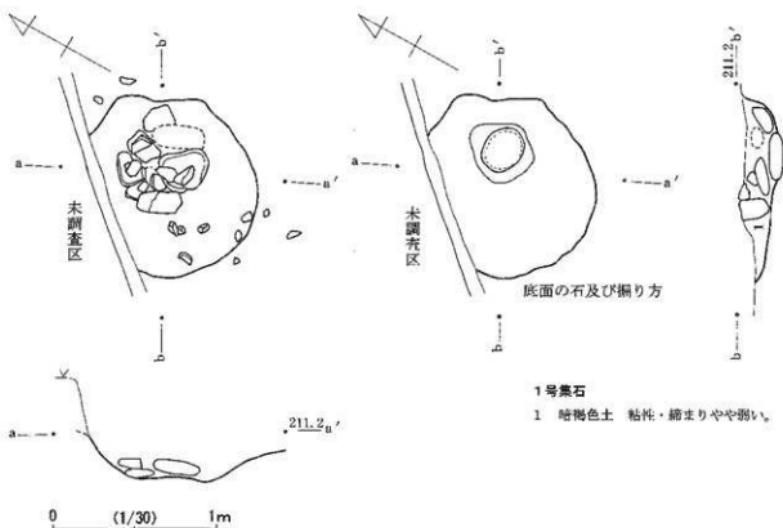
一方、古代の遺構面下は未発掘のため不明確だが、段丘縁辺部で縄文時代のものと推定される集石1基を検出した。本遺構は、被熱痕のある礫が多く用いられていることから、いわゆる屋外集石場として、熱した礫群を用いた食物の調理施設であった可能性がある。同様の遺構は同一段丘上で多数検出されている。

註1 1975『上野原町誌』上巻ではⅠとⅡを逆に表記しているが、本書では1973『山梨県埋蔵文化財調査カード』いわゆる遺跡台帳に従った。

註2 2015「第IV章まとめ」『狐原遺跡』上野原市埋蔵文化財調査報告書第7集 上野原市教育委員会

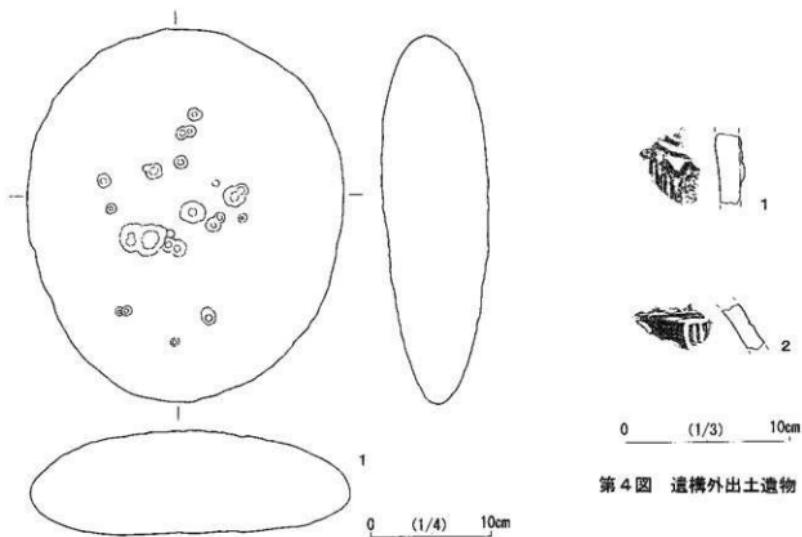


第2図 発掘区全体図及び遺構分布図



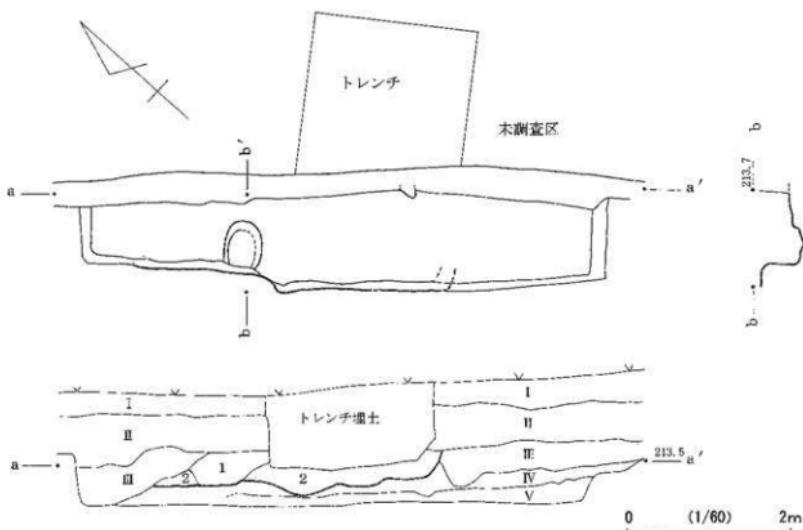
1号集石

1 暗褐色土 粘性・締まりやや弱い。



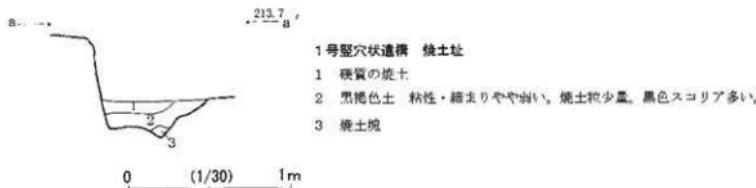
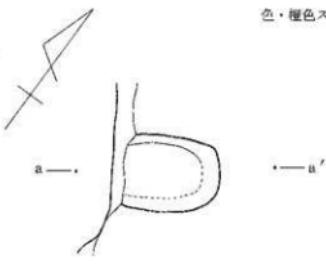
第4図 遺構外出土遺物

第3図 集石、出土遺物

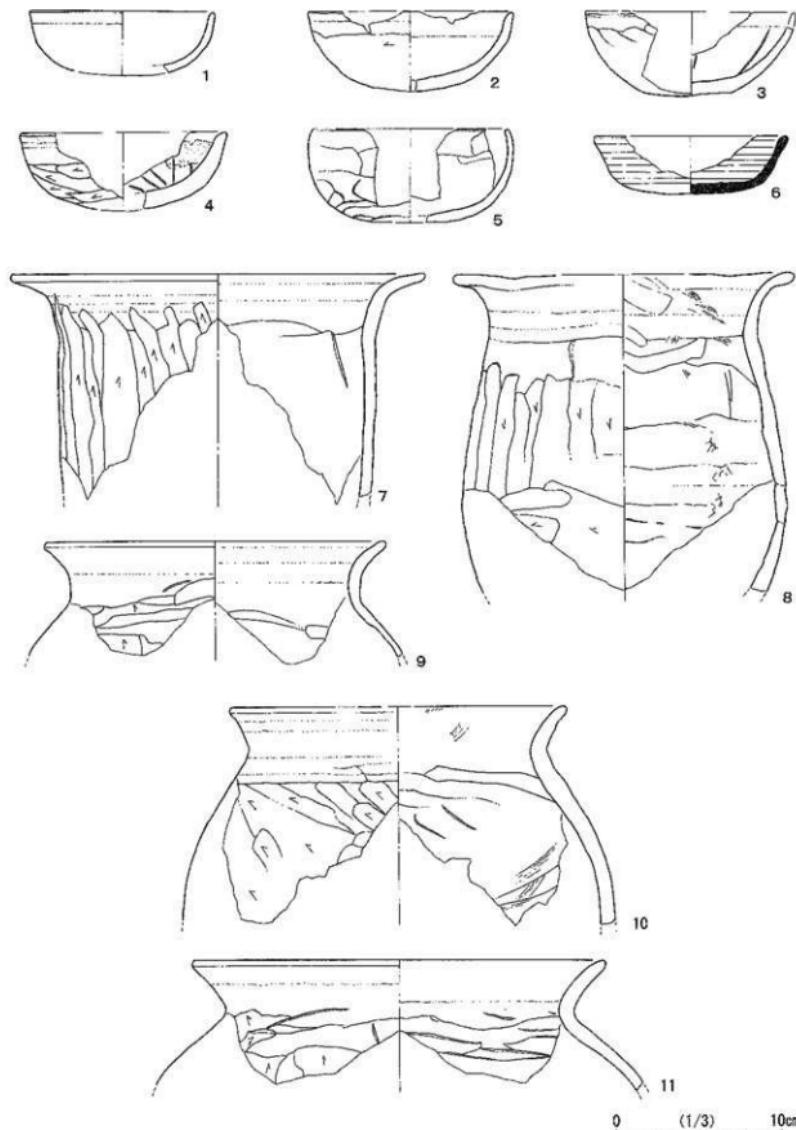


1号竪穴状遺構

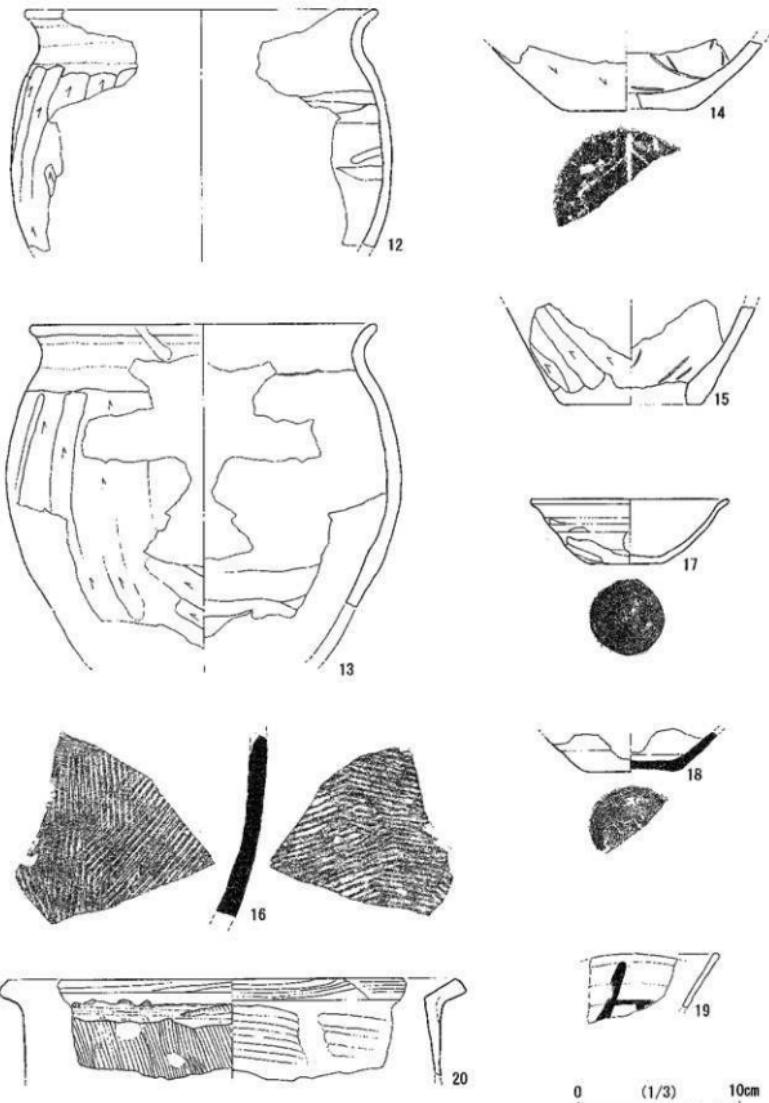
- 1 にぶい褐色土 粘性・縮まりやや弱い。焼土粒・塊、炭化物、白色粘土粒、黒色スコリア多い。
- 2 黑褐色土 粘性・縮まりやや弱い。焼土粒やや多い。炭化物、白色粘土粒含む。土器片多い。黒色・褐色スコリアやや多い。



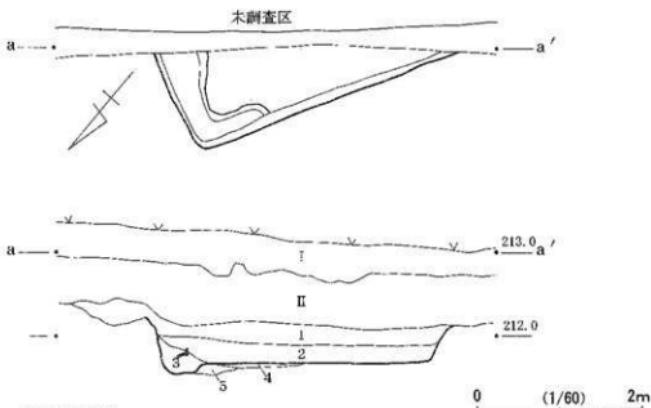
第5図 1号竪穴状遺構、焼土址



第6図 1号竪穴状造構出土遺物（1）

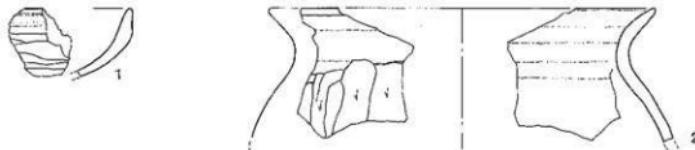


第7図 1号竪穴状遺構出土遺物（2）

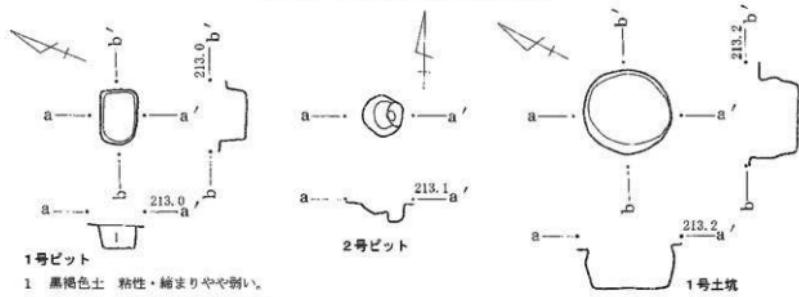


2号竪穴状遺構

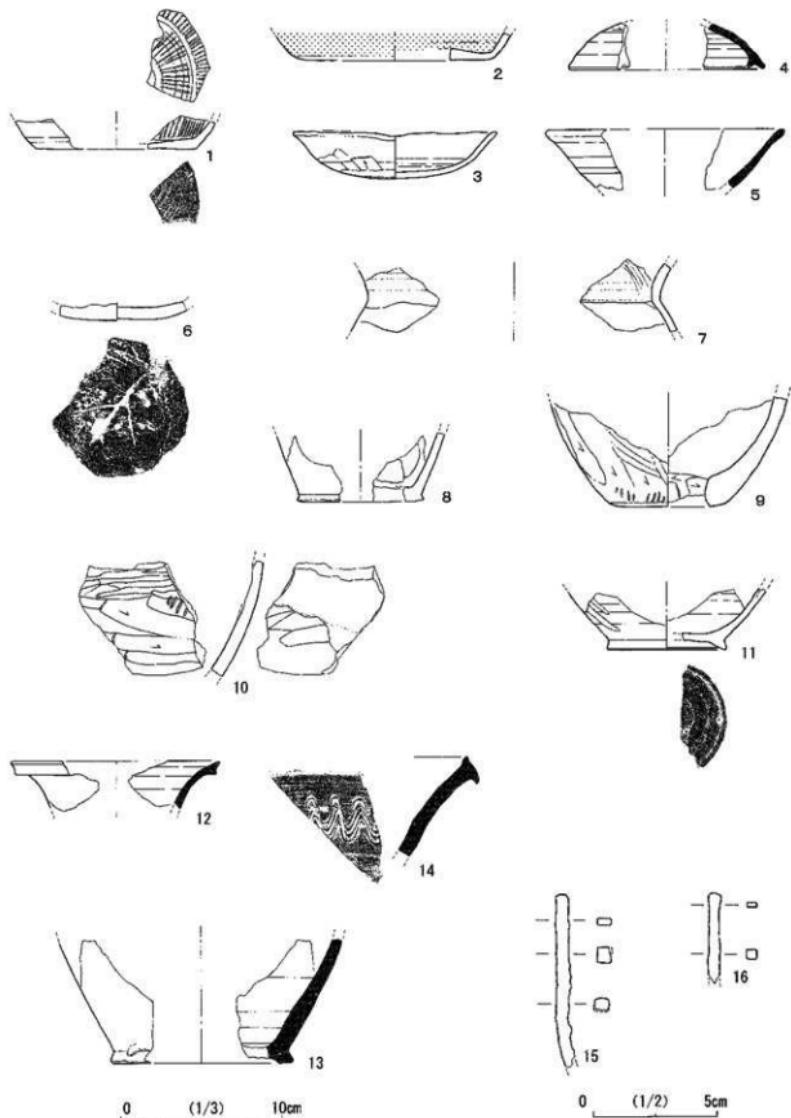
- 1 噴褐色土 粘性強く、縮まりやや弱い。焼土粒少々。土礫片、黒色スコリアやや多い。
- 2 噴褐色土 粘性強く、縮まりやや弱い。焼土粒少々。黒褐色土を斑に含む。黒色スコリア多い。
- 3 噴褐色土 粘性強く、縮まり弱い。白色粘土粒含む。白灰床。
- 4 噴褐色土 縮まりやや強い。白色粘土粒含む。白灰床。
- 5 噴褐色土 4に似るが、縮まりやや弱い。



第8図 2号竪穴状遺構、出土遺物



第9図 ピット、土坑



第10図 遺構外出土遺物

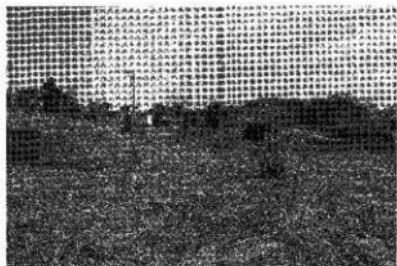
第1表 出土遺物観察表

図 No.	出土位置	種別	法量 cm () は推定値	色調	胎土	調整	備考
6 1	寺堅六櫻土	土師器坏	口径 (10.8) 器高 (3.5)	に赤い橙色、金黄色、砂粒	ロ銀横ナダ。体部外面へラ削り、ナダ		
6 2		土師器坏	口径 (12.8) 器高 (4.9)	褐色	金黄色、砂粒、小石	ロ銀横ナダ。体部外面へラ削り、ナダ	
6 3		土師器坏	口径 (13.0) 器高 6.1	に赤い褐色	赤色粒子、砂粒、小石	ロ銀横ナダ。体部外面粗いへラ削り	
6 4		土師器坏	器高 (4.8)	褐色	砂粒	ロ銀横ナダ。体部外面へラ削り	ロ銀内面が灰黒
6 5		土師器坏	器高 5.8	に赤い褐色	砂粒、小石	ロ銀横ナダ。体部外面粗いへラ削り	
6 6		須恵器坏	口径 (11.9) 器高 (3.5)	灰白色	月牙付有孔なし	コクロナダ	
6 7		土師器壺	口径 (25.5)	褐色	金黄色、砂粒	ロ銀横ナダ。腹部外面へラ削り、内面へナダ	
6 8		土師器壺	口径 (20.5)	褐色	金黄色、砂粒、小石	ロ銀横ナダ。腹部外面へラ削り、内面へナダ	
6 9		土師器壺	口径 (21.0)	褐色	金黄色、砂粒	腹部外面へラ削り後に一部へラ削き、内面へナダ	ロ銀外面の一部に黒墨
6 10		土師器壺	口径 (20.5)	に赤い褐色	砂粒	腹部外面へラ削り後に一部へラ削き、内面へナダ	
6 11		土師器壺	口径 (25.0)	に赤い褐色	赤褐色な白色粒子、砂粒、泥等	ロ銀横ナダ。腹部外面へラ削り、内面へナダ	
7 12		土師器壺		に赤い褐色	砂粒	ロ銀横ナダ。腹部外面へラ削り、内面へナダ	
7 13		土師器壺		褐色	砂粒、小石	ロ銀横ナダ。腹部外面へラ削り、内面へナダ	
7 14		土師器壺	底径 (8.3)	褐色	砂粒、小石	腹部外面へラ削り、内面へナダ	
7 15		土師器壺	底径 (7.0)	褐色	砂粒	腹部外面へラ削り、内面へナダ	
7 16		須恵器壺		灰白色	白色粒子	平行叩き目	
7 17		土師器壺	口径 (12.0) 器高 3.9 底径 4.6	に赤い褐色	赤色粒子、砂粒	ロクロナダ後、体部下半へラ削り、底部回転舟切り後へラ削り	平型
7 18		須恵器壺	底径 5.2	灰色	白色粒子、砂粒	底部回転舟切り	
7 19		土師器壺		に赤い褐色	赤色粒子、金黄色	ロクロナダ後、体部下半へラ削り	甲型。墨書
7 20		土師器壺		明赤褐色	金黄色、石英	ロ銀横ナダ。腹部ハケ (外腹、内腹)、ナダ	甲型
8 1	寺堅六櫻土	土師器坏		褐色	石英、滑石	ロ銀横ナダ。体部外面へラ削り、ナダ	
8 2		土師器壺		褐色	強磁な白雲母、砂粒	ロ銀横ナダ。体部外面へラ削り、内面ナダ	
10 1	Bトレンチ	土師器坏	明赤褐色	赤色粒子	外腹磨き、内腹放状次峰文。底部回転舟切りへラ削り		
10 2	Bトレンチ	土師器坏	赤色	砂粒	ロクロナダ。腹部外面へラ削り	内外に墨影。	
10 3	Cトレンチ	土師器壺	口径 (12.5) 器高 2.9	褐色	赤色粒子	コクロナダ。体部下半・底部へラ削り	甲型
10 4	Gトレンチ	須恵器壺蓋	口径 (11.8)	褐灰色	白色粒子	ロクロナダ。天井船回転へラ削り	
10 5	Hトレンチ	須恵器坏		褐灰色	白色粒子、砂粒	ロクロナダ	
10 6	Hトレンチ	土師器壺	底径 5.5	に赤い黄褐色	砂粒	腹部へラ削り	底部に水素痕
10 7	Hトレンチ	土師器壺		褐色	白色・赤色粒子、露骨	ロ銀横ナダ、耕泥ナダ	相模型
10 8	Hトレンチ	土師器壺	底径 (7.7)	に赤い黄褐色	赤色粒子、黑色	耕泥ナダ	相模型
10 9	Hトレンチ	土師器壺	底径 (7.4)	褐色	赤色粒子、砂粒	腹部外面へラ削り、内面ナダ	
10 10	Iトレンチ	土師器壺		に赤い褐色	赤色粒子、石英、砂粒	体部外面上半へラ削き、下半へラ削り。内面ナダ	内面は墨色で、大きく断落
10 11	Gトレンチ	土師器壺	底径 (7.2)	に赤い黄褐色	白色粒子、石英、砂粒	ロクロナダ。底部回転舟切り	
10 12	Hトレンチ	須恵器壺	口径 (12.8)	灰色	白色粒子	ロクロナダ	内外に暗(天オジーバ色)
10 13	Gトレンチ	須恵器壺		褐灰色	砂粒	ロクロナダ	外曲に粘土(黄褐色)付着
10 14	不明(塵土)	須恵器壺		灰色	白色粒子、小石	ロクロナダ	
10 15	Hトレンチ	鉄鏃	現存長 7.0 幅 0.5 厚さ 0.15~0.3 重さ 4.4 g	鑿削式			
10 16	Gトレンチ	鉄鏃	現存長 3.7 幅 0.4~0.5 厚さ 0.1~0.4 重さ 1.9 g	鑿削式			

图版1



遗迹航空写真



调查地近景



发掘区全景



1号集石



1号集石の底石

图版 2



1号竖穴



2号竖穴



1号穴 2



1号穴 3



1号穴 6



1号穴 8



2号穴 2



1号穴 17



遗构外 3

報告書抄録

ふりがな	きつねはらいちいせき							
書名	狐原 I 遺跡							
副書名	診療所新築造成工事に伴う狐原 I 遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	上野原市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	小西直樹							
編集機関	上野原市教育委員会							
所在地	〒409-0192 山梨県上野原市上野原 3832 電話 0554-62-3409							
発行年月日	2017年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
きつねはらいちいせき 狐原 I 遺跡	やまなしけん 山梨県 うえのはらし あらか 上野原市 新田 47、48	192121	5-1	35° 36' 59"	139° 7' 36"	20160719 ～ 20160805	232	記録保 存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
狐原 I 遺跡	集落	绳文時代	集石 1	绳文土器、石器				
	散在地	古代	竪穴状造構 2 ピット 2、土坑 1	土師器、須恵器、 金属製品				
要約	狐原 I 遺跡は山梨県最東端の遺跡で、和様川（桂川）沿いの河岸段丘に位置する。過去の発掘調査では古墳時代後期から奈良・平安時代の集落址が検出されているが、今回発見された遺構は、この集落の西側を構成するものと思われる。							

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第8集

狐原 I 遺跡

診療所新築造成工事に伴う狐原 I 遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年2月28日発行

編集発行 山梨県上野原市上野原 3832 上野原市教育委員会

印 刷 山梨県上野原市上野原 3768 カヤヌマ印刷